

リンパ浮腫ケア介入 活動報告

8階南 渡部 麻子 伊藤加代子
12階北 岩永美世子

【はじめに】

がん連携拠点病院および地域の中核医療機関として、当院に多くのがん患者が受診し、様々な医療・看護を受けている。しかしその一方で、原疾患よりも上肢や下肢の腫れ（リンパ浮腫）に苦しみながら、生活している患者が少なくなく、終末期においてはその浮腫が顕著となりQOL（生活の質）の低下を招いている。平成22年12月リンパ浮腫技能指導者養成講座を修了し、約2年が経過し、様々な活動を行ってきたのでここに報告する。

【内容】

8階南にて乳がん・婦人科がんの手術を受け、多くの患者が外来通院をされている。また他病棟においても、手術後の影響でリンパ浮腫が発生し不安や苦痛を訴え相談や問い合わせが増えた。その状況を踏まえ、以下の内容を実践した。

I. 現状分析・課題解決に向けての活動

1) リンパ浮腫に対する知識の普及

- (1) 看護セミナーの開催（第1・2・3回）
- (2) 外来対象学習会

2) リンパ浮腫介入のフロー図の作成

3) 相談用紙の作成

4) リンパ浮腫チェックリスト作成

5) リンパ浮腫指導管理料（外来）算定方法と外来との連携

2. リンパ浮腫顕在患者のケア介入の実際

1) 活動実績

2) 事例紹介

【まとめ】

リンパ浮腫は「リンパ系の輸送障害によりリンパ輸送能力が低下して間質内の血漿由来の蛋白や細胞が運搬できずに貯留すること」と定義づけられている。リンパ浮腫はいったん発症すると治癒することが難しく、患者自身による早期発見・対応が非常に重要である。看護師の果たす役割は大きく、予防指導・発生抑止、早期ケア介入が求められる。本格的活動とは言い難く、まだ始まったばかりの状況である。今後は質の高い看護が提供できるよう、また電子カルテによる予約システム構築や看護外来：リンパ浮腫外来（仮称）開設に向け勢力的に実績を積んでゆきたい。

リンパ浮腫ケア介入 活動報告

12階北病棟 岩永 美世子
 ○ 8階南病棟 渡部 麻子
 伊藤 加代子

はじめに

- リンパ浮腫は発症すると治癒することは難しく、患者自身による早期発見・対応が非常に重要である。
- 看護師の役割は大きく、予防指導・発症抑止、早期ケア介入が求められる。



活動1 リンパ浮腫の知識の普及

□ 看護セミナーの開催

第1回：リンパ浮腫学習会～予防指導に向けて～

参加人数 52名

アンケート結果（50名）

- ・リンパ浮腫はあまり見たことがなかったので勉強になった
- ・リンパ浮腫の理解を深めることができて、興味も持てた
- ・予防指導を細かく知れて良かった
- ・弾性着衣を着けたい、演習したい
- ・実際のリンパドレナージを見たい、方法を演習したい



□ 看護セミナー

第2回：リンパ浮腫の治療

～多層包帯法・リンパドレナージの実演～

参加人数 25人

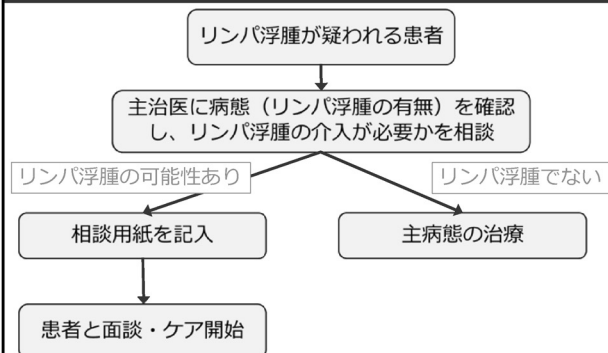
第3回：弾性ストッキングの正しい装着方法

参加人数 20人



□ 外来スタッフ（婦人科・外科）対象学習会 リンパ浮腫学習会～予防指導に向けて～

活動2 リンパ浮腫 介入フロー図の作成



リンパ浮腫指導管理料（外来）の算定と外来との連携

- 入院中に指導するだけでなく退院後にもリンパ浮腫の予防指導をすることがとても重要であり、外来での指導に対して管理料が認められている。

リンパ浮腫指導管理料（100点）

□ チェックリスト作成

- ・入院中の指導内容について、外来受診時に理解の程度を確認することができる
- ・病棟と外来、継続的に関わるツールとして活用



リンパ浮腫顕在患者のケア介入の実績

活動実績（平成23～24年度）

		平成23年度	平成24年度
婦人科・ 乳腺外科	介入患者数	3	27
	介入時間 (分)	160	2450
その他 診療科	介入患者数	8	5
	介入時間 (分)	755	755

事例紹介



40代女性
子宮頸癌にて広汎子宮全摘術後
リンパ浮腫Ⅱ期～Ⅱ期後半
症状：脚が重い、ゆったりとしたス
カートしか履けない、靴も履きづら
い

部位	右	左
大腿	59.5	64.6
膝上10cm	45.6	53.2
膝下5cm	32.6	35.5
足首	20	21.8
足背	22	21.8

ケア介入後



弾性ストッキング（着圧30～40mmHg）
5月28日からLサイズ着用
11月22日からはMLサイズにダウン。

	5月14日	7月23日	11月22日
左脚			
大腿	64.6	62	58.7
膝上10cm	53.2	49	46.6
膝下5cm	35.5	33.1	32
足首	21.8	21.4	19.8
足背	21.8	21.6	21.2

事例紹介



事例紹介



まとめ

- 患者に質の高いケアを提供できるようにするため、引き続き知識の普及とケア介入の体制作りが必要である。

